

令和 2 年 9 月 10 日現在

機関番号：33703

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04585

研究課題名（和文）海外につながる子ども達の表現力・協働力を促進するドラマワークショップの開発

研究課題名（英文）Developing the workshop to promote the self-expression and cooperation of the foreign children

研究代表者

松井 かわり（Matsui, Kaori）

朝日大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70421237

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヴィゴツキーの発達研究および社会文化的理論を基盤とするパフォーマンス心理学に基づき、海外につながる子ども達に対するドラマワークショップ（以下ドラマWS）の指導プログラムの開発を行った。文化的に多様な背景を持つ子ども達がドラマWSを通して日本語力などリテラシーの涵養とともに、心理的不安を克服し人間関係を築く力の育成を目的とした。外国人の子ども達が学ぶ国際学級や、アフタースクール活動において、ドラマを応用した活動を複数回実践し、そのプログラムをまとめた。また小、中学校教員、外国人児童生徒適応指導員、日本語教室の指導員らを対象とし、ドラマを応用した教科教育に役立つプログラムを試行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的、社会的な意義は次の3点である。1) ドラマを応用した教育を提案する中で、従来の研究射程に入っていなかった、学校におけるドラマを媒介とした教科教育や、リテラシー教育の可能性を導いた。2) 研究の場として、学校以外に放課後活動も対象とし、学校教員のほか、地域の指導員や市民ボランティアの協力も得たことから、外国人の子ども達の教育を地域で支えるための事例を提示できた。3) 外国人の子ども達だけでなく、日本人の子どもとその保護者が共に参加したことにより日本人の子ども達にとっての学びの有効性も確認できた。

研究成果の概要（英文）：This research was conducted to develop the drama workshop program for linguistically and culturally diverse children, based on the socio-cultural approach and performance psychology. The purpose of the drama workshop is fostering their literacy and reducing their anxiety leading to establishment of relation to others. Through the several promoting the drama activities at Japanese class at school and after-school activities, we summed up them and made application examples. We also discuss how the teacher can apply drama technique in the subject learning under multilingual and multicultural situation.

研究分野：外国語教育、コミュニケーション論

キーワード：多文化・多言語 社会文化的アプローチ ドラマ 海外につながる子ども 自己表現 共同体

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、ヴィゴツキーの流れをくむニューマン(2008) & ホルツマン(2009)は、パフォーマンス心理学の立場から、人の発達が集団における協働的な学びである点を強調し、特に学習者の感情や情動を省除してきた従来の心理学を批判して、何かを誰かと一緒に演じ遊ぶことやその環境が多様であることの重要性を指摘した。日本の学校教育は、長い間日本語を母語とし日本文化に親しんだ児童・生徒のみを教授対象としてきたため、文化的言語的多様性を持つ子ども達は、日本語指導の必要な手のかかる子ども、あるいは学習遅滞児と認識されることが多い。しかしホルツマンたちのように、人の発達を多様さの中での協同パフォーマンスと捉え直すと、多文化・多言語の子ども達は、多様な学習環境を創りだすリソースとして、十全に授業への参加が可能となる。

本研究開始前には、市民共同活動としてのドラマを観察してきたが、本研究においては学校と学校をとりまく地域社会で、ドラマを活用した外国人の子ども達の教育を考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヴィゴツキーの発達研究及び社会文化的理論を基盤とするパフォーマンス心理学に基づき、海外につながる子ども達に対するドラマを応用したワークショップのプログラムを開発することである。

3. 研究の方法

- (1) 調査予定地の変更に伴って(協同を予定していた教員が複数名、調査予定地外の学校へ異動となったため)、新しい調査地での外国人児童生徒の取り出しクラスの参与観察と、外国人児童生徒が在籍する小、中学校での授業観察及び、教師へのインタビューを実施した。同時に、調査地外での高等学校における授業観察や教師へのインタビューも実施した。それらの学級における教師と児童生徒のやりとりの特徴や、教員の外国人児童生徒への指導方法に対する思考の特徴を探った。
- (2) 調査対象地区の教育委員会の要請を受けて、希望外国人児童生徒のための放課後補習教室を準備し、試行した。その中で、外国人児童生徒の日本語習熟度を「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA を用いて調べ、また生活環境や家庭背景についても、対面式の聞き取りによって調査を実施した。日本語習熟度が異なり、日本での滞在年数も異なる参加者に向けて、ドラマを応用した活動を通じて、他者との関わりやことばへの興味が育つのかを観察した。
- (3) 調査対象地区の教育委員会と協議し、参加者が限定される放課後補習教室外国人児童生徒の在籍率が多い学校に、市民から学習支援員を募り派遣する制度を導入した。市民支援員たちへの支援方法の聞き取りや、受け入れる教師側への聞き取りを行い、外国人児童生徒が在籍するクラスや、取り出しクラスでの市民ボランティアと学校、教育委員会の連携の仕方を探った。
- (4) 調査対象地区で新たに、外国人児童生徒のための支援グループを立ち上げ、市民が主体となった外国人児童生徒の支援方法について検討を重ね、学校では実施が難しい支援方法を試行することになった。具体的には、外国人児童生徒に向けたドラマを応用した活動を学校外で実施し、その場の相互行為はビデオで記録し、またフィールドノーツをとって、外国人の子どもと日本人の子ども、外国人の子どもと大人のやりとりに注目して分析を行った。講師には、移民大国である UK のファシリテーターを招聘し、UK では、コミュニティーのほか、学校においてどのようなドラマ的活動が実施されているのかについての紹介を受けた。また教科学習に特化した活動をファシリテーターから提案してもらい、実際に教員、学習支援員やボランティアグループの大人たちが体験して議論を行った。
- (5) 調査対象地区外の外国人生徒と、大学生、市民が協働するドラマ合宿を企画し、その様子をビデオで記録するとともに、参加者からの聞き取りを行った。

4. 研究成果

(1)の調査から、研究対象教師たちがみな自身が考える外国人の子ども達に対する「理想的な働きかけ」と日々の実践で直面する未経験でかつ困難な出来事の間で葛藤しているという点で共通していた。しかし、外国人集住地区の学校での勤務経験の長さによって、教師の語りの内容や指導方法に違いがみられた。英語ネイティブの教員であっても、英語しか話せない児童の教授方法に苦慮している場面が観察される一方、生徒の大半が日本語習熟度が異なる外国人生徒であっても、授業でのコミュニケーションが円滑に進んでみえる日本人教師の授業もあり、その違いを「複線経路等至性アプローチ」TEA を用いて質的に記述し、違いを生んだ要因を探った。その要因としては、外部組織・人との協力、リーダー、視聴覚機器、やさしい日本語、インクルーシブが挙げられた。

(2)の調査から、日本での滞在期間が3年から4年以上あり、通常日常会話レベルを見込まれる児童生徒でも、使用頻度の高い単語の親密度が低く、話すことに困難を抱えている者が複数名いることが明らかとなった。また、日常会話が堪能であり、担任教師から問題ないとされている児童生徒でも、教科学習に関係のある単語や表現に躓く子どもが目立ち、教科学習の遅滞が推測された。生活調査では、同じエスニックグループと学校内外で過ごしている者が大多数であり、学外で習い事をしている者は聞き取り対象児童生徒の中にはいなかった。家庭では、家事や兄弟の世話にほとんどの時間を費やしている児童も存在した。それらの結果を報告書にまとめ、教育委員会や地域の学校へ配布し、外国人児童生徒の日本語力や、生活実態についての理解共有を図った。

教育委員会や学校が主体となった補習教室では、保護者の送迎の必要や、教室開設時間の制約などの理由で、多くの子ども達の参加が望めないことから、新たな市民学習支援員制度の導入や、外国人児童生徒の市民サポートグループの結成を図った。

(3)の調査から、支援員たちは派遣先の学校では、具体的な支援方法についての指示を受けておらず、各々が悩みながら自己判断によって状況に応じた指導を行っていることがわかった(手作りの教材教具の用意、筆談や辞書翻訳を用いたコミュニケーション、教室内での立ち位置、座り位置の工夫など。)しかし、一番大きく悩んでいるのは、担任教師との教授観の違いであり、支援員という立場で、子ども達との接し方や使用言語、教授スタイルを巡って教師との板挟みになっている様子が浮かび上がった。また他の外国人集住地区での教育実践に高い興味を持ち、その見学や研修を望む声が高かったが、実際には、支援員、外国人児童生徒を担当する教員には研修を受ける機会が設けられておらず、また関係者が全員揃う機会もない状況にあり、教育委員会、学校、担任教師と支援員の間での情報交換や話し合いの場の必要性が明らかになった。

(4)の調査から、外国人児童・生徒と保護者、日本人児童・生徒と保護者が共にドラマを援用した活動を行うとき、外国人児童と日本人児童、日本人保護者の間で活発なやりとりがある様子が観察された。ドラマ活動だけでなく、写真や工作活動を媒介にしたとき、さらにコミュニケーションが活発となり、ことばでの応答も多く観察された。また、教科学習に関連したドラマ活動のうち、日本の教科学習内容へすぐに援用できると思われる活動と、さらに工夫が必要な活動が検討され、援用可能な教科と学年が検討された。(4)の活動の一部は報告書にまとめられた。

(5)の調査から、ドラマ活動に参加した生徒への聞き取りにより、「他者に自分を委ねて受け入れられたことで、自分もグループの一員となり、活動に貢献している気持ちになった」と肯定的に捉えている者が多くいることが明らかになった。ドラマ活動では、他者への反応が必須となるため、ことばではそれが困難な外国人であっても、身体活動での応答を積み重ねるその過程で、ことばが後から重なっていく様子が観察された。即興的なドラマ活動でもことばが追加されていく様子が観察され、特に繰り返しの活動の中では、全体として、前の演者を模倣し反復しながら、少しずつ変化が引き継がれていく様子が観察された。(5)の活動の一部は、ドラマ実践を収録した本の中に記録された。

今後の課題として、海外につながる児童生徒が日本語学習の途上であっても、日本人児童生徒と共に学ぶことができる教育の在り方の探究がある。調査対象地では、益々外国人児童生徒数が増加しており、さらに長期間滞在しながら地域社会で生活していく子ども達の数が顕著になってきた。彼らが文化的にも言語的にも多様であり、異なる学習履歴を持つことから、彼らに対する一律な教育プログラムの実施や、完全な個別指導には限界がある。そのために日本人児童生徒と外国人児童生徒が共に学ぶ学習の場づくりが求められている。ドラマ活動などアートを利用した活動を試行し事例を蓄積していくことは有効だと思われる。現場の教員とともに、ドラマやアートを利用した授業シラバスを作成する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松井かおり	4. 巻 第43号
2. 論文標題 海外にルーツがある子ども達の教育における市民サポーターの役割 - 瑞穂市外国人児童生徒支援員の支援方法に焦点をあてて -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 朝日大学一般教育紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 13413589	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松井かおり	4. 巻 42
2. 論文標題 海外にルーツを持つ子ども達の言語・生活調査報告 - 瑞穂市の放課後日本語補習教室における事例から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 朝日大学一般教育紀要	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松井かおり
2. 発表標題 言語を創造する場としてのリフレクション - 多文化・多言語活動における振り返り会の参加者の語りから -
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井かおり
2. 発表標題 「多文化・多言語活動が創るわたしのことば、私たちのことば」
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井かおり
2. 発表標題 海外にルーツがある子ども達が参加する英語授業における教師の思考
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田喜美、半沢千絵美、河野俊之
2. 発表標題 フィールドワーク科目における 外国人児童生徒等教育に関わる教員養成充実化の試み：留学生共同ワークショップとフィールドワークとを組み合わせた授業実践の事例から
3. 学会等名 日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松井かおり
2. 発表標題 英語授業という場の制約を越えたコミュニケーション環境の創造をめざして
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 kaori Matsui
2. 発表標題 How do plays change less-confident English learners to be fully- participating communicators in a multicultural multilingual situation?
3. 学会等名 2017 ALAK International Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 (編著) 松井かおり (著) 田室寿見子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 258
3. 書名 『演劇ワークショップでつながる子ども達 多文化・多言語社会に生きる』	

1. 著者名 齋藤義雄(編) 梶原郁郎, 内山仁, 佐久間敦史, 岩本泰, 武市久美, 松井かおり, 勝田映子, 丸林実千代, 立川泰史, 龍崎忠, 黒川哲也, 福岡亮治, 宇都宮明子, 北川剛司, 窪田知子, 太田誠, 三品陽平, 矢部玲子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大学図書出版	5. 総ページ数 234
3. 書名 『教育方法・技術論 - 主体的・対話的で深い学びに向けて - 』	

1. 著者名 原田大介, 稲田八穂, 宮本郷子, 永田麻詠, 石田喜美, 妹尾知昭, 羽田野真帆, 松井かおり	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東洋館出版	5. 総ページ数 75
3. 書名 『全国大学国語教育学会公開講座ブックレット インクルーシブ教育とアクティブラーニング - 教室の中の多様性・多言語・多文化と授業づくり - 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	今井 裕之 (Imai Hiroyuki) (80247759)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	吉田 達弘 (Yoshida Tatsuhiko) (10240293)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	
研究 分 担 者	石田 喜美 (Ishida Kimi) (00612996)	横浜国立大学・教育学部・准教授 (12701)	